
雪の中

Shin=Shin

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の中

【Nコード】

N8771U

【作者名】

Shin=Shin

【あらすじ】

とある雪の日、一人の女性が森の中で不思議な体験をする。

深い森の中。葉の落ちた木々はすっかり化粧をし、行く道にも複数の足跡が残るだけの白でした。しかし、その足跡も空から振り落ちる無彩色の化粧玉によって消されていきました。

駅舎へと繋がる小さな野道。決まってくる自動車といえば、橙色のボンネットバスか小型のトラック程度でした。その小道をひとつの赤い傘が通って行きます。傘の持ち主は、似合わない黒い長靴を履いて駅舎まで着くと、ふう、と柔らかに白い息をはきました。

腐りかけた以上に年季の入った木々で組まれた駅舎には駅員はおるか、誰もいませんでした。辺りを見回すと、その人は赤い傘を折りたたみ、屋根付きのベンチへと座りました。

折りたたむ赤い傘の中からは、肩まで伸びた黒髪に、香色にも似た肌、そして透き通った焦茶色の瞳を持った、美しい女性の姿が現れました。その女性は、早速手に持っていた鞆から小さな文庫本を取り出し、読み始めます。

それから、何十分が経ったあるとき、女性の視界に一匹の猫がとことと歩いて来ました。それは、茶色のしま模様の体を持った、トラ猫でした。頭いっぱいに雪を被っているその姿は、まるで白い帽子をしているかのようです。

「うっ、今日は一段と冷えますな」

「え？」

誰もいないはずの駅舎から、声が聞こえました。少し低めの男の声。「ん、どうかしましたか？　まるで木からドングリが落ちたかのような顔をしていますな、まあこの季節にドングリは落ちていませんけどね」

「誰？」

「誰とは失礼な、貴女の隣ですよ、見えませんかお嬢さん？　もし

もし？」

女性の見た先、そこにいるのは先ほどのトラ猫でした。

「そうそう、私、私ですよ」

「猫さん？」

トラ猫は、ベンチの上で丸くうずくまっていました。女性は、思わず文庫本を閉じてしまいました。

「猫が喋るのは変ですか？　少し世間話をしたくらいでバチは当たりませんよ」

「は、はあ……そうですね」

女性は、少し苦笑いをしました。

「ところで、貴女は何故ここに？　みたところ車を待っているわけでもないようですね。ちなみに私は、ここにこうやっていることが日課なので、ここにいます」

「私は、帰ってくる人を待っているんです」

「帰ってくる？」

「ええ、夫です」

「なるほど！　それでは先ほど“お嬢さん”と言ったことは撤回しなくてはいいけませんな」

トラ猫は、目を大きく見開いて言いました。

「いいえ、構いませんよ、どんな呼び方でも」

「そうですね？　では“お嬢さん”と呼ばせてもらいます」

女性はトラ猫に笑って会釈した後、再び文庫本を開き読み始めます。

「さて、少しだけ寝ましようかね……貴女の夫さんを見届けてから帰ることにしますよ」

そう呟くと、トラ猫はベンチ脇で眠り始めました。

読んだページが、半分を越えた頃に今度は一羽の野ウサギが、何にも目をくれず一目散にベンチへと駆け寄りました。

「またいた！　またいた！　ベンチはお前のものじゃない！　トラ

猫！」

野ウサギが高めの男性の声で叫びました。今度は女性も驚きませんでした。

「折角、寝ようと思ったのに……ウサギ先生はいつも手厳しいですなあ」

トラ猫は、自分の肉球を舐めつつ言いました。

「まったく、早く戻れ！ 授業中に抜け出すとはけしからん！」

野ウサギは、鼻をふんふん鳴らして憤慨しています。

「あ、授業中だったのですか、ウサギさん」

女性は野ウサギに尋ねました。

「ええ、そうです。こいつと来たら、授業をすっぱかしていつもここにいますよ」

「私はね先生、この方の夫を見届ける約束をしたんですよ」

トラ猫は言いました。

「……それは本当ですか？」

野ウサギは、女性に聞きました。

「ええ、まあ」

女性は答えました。

「仕方ないですな、それでは私はトラ猫の言っていることが事実なのか確かめるために、ここにすることにしましょう」

物語りも終盤に差し掛かり、残りのページ数も減ってきたとき、急に雪がひどくなってきました。ふわりと落ちていた化粧玉も、次第にその数も早さも増し、形も大きくなっていました。そんなとき、今度は大柄な狼がやってきました。今度ばかりは女性も少し落ち着かない様子です。

「あ、あの……ウサギさん、あの子は？」

女性は野ウサギに恐る恐る聞きました。

「あの子……？ ああ狼君ですね、大丈夫です、彼は私の優秀な生徒です」

野ウサギは、鼻を高くして言いました。

「ウサギせんせえ……」

少年のような声をした狼は、しょんぼりとした口調で言いました。

「どうしましたか？ 狼君、自習していなさいと言ったはずですよ？」

「空腹でさあ……」

狼のその一言に、女性だけがびくんと肩を揺らしました。

「ん、この人は……？」

狼は尋ねます。

「ちよつと世間話をしていたただけだよ、そして今はこの方の夫さんを見届けようと待っている最中だ」

とトラ猫。

「そして私は、そのトラ猫の言っていることが本当か嘘か確かめるためにここにいます」

と野ウサギ。

「わ、私はこの駅を通る汽車に乗って帰ってくる夫を待っているんです」

と女性。

「ふうん……お忙しそうで。その貴女、何か食べるもの持ってませんかあ？」

ぎろり、と睨まれた女性は、読み終わった文庫本を仕舞い、偶然鞆の中に入っていたイチゴキャンディを取り出し、狼に渡しました。

「これは、有難いです」

「まさか、私を食べたりはしませんよね？」

女性は尋ねました。

「失敬な、そんな真似はしませんよ……我慢しますしね。しかし、この飴玉は美味しい」

口の中で器用に転がしながら狼は言いました。

「——僕も、お優しい貴女の夫が見てみたくなっただな、僕も見届けるまで帰らないことにします」

辺りが真つ暗になり、木の電信柱に据え付けられた暗く、優しい光を放つ街灯がぼつん、ぼつんと付き始める頃になるまで、女性とトラ猫、野ウサギ、狼は様々な話をしました。

どうして冬場なのに冬眠をしないのかと尋ねてみれば、それは勉強の出来る余裕のある者だけが許される行為であり、勉強をしたがる者は冬眠をしないという、仰天の答えが返ってきたりもしました。急に、辺りが明るくなりました。軽便鉄道の煙が化粧玉の間をもくもくと出しながら、駅のホームへと、ゆっくり入ってきました。女性 は立ち上がり、改札口の前に立ちました。

外から見える客車の中は、がらんとしており、降りてくる人も全くいませんでした。そんな中から、手に傘と鞆を持った黒いロングコートを羽織る若い男が改札口へと一目散に歩いてきます。

「おかえりなさい」

「もしかして、随分と待たせちゃったかな」

男は軽く笑みを浮かべて言いました。

「いいえ、全然待つてはいませんわ、むしろ楽しかったくらいです」

女性はそう男に言くと、ちらつと後ろを振り向きました。しかし、既にそこに彼らの姿はありませんでした。

「怖がつて逃げ出しちゃったかな……？」

「何のこと？」

男の質問に、女性は小さく首を横に振りました。

「なんでもないです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8771u/>

雪の中

2011年7月21日03時39分発行